

資金繰りのルールを覚えよう

1. 勘定合って銭足らず

「勘定合って銭足らず」とは、売上が順調に上がって利益が出ているのに現金がない状態をいいます。

つまり、「いつもニコニコ現金商売」である現金主義会計であれば利益が現金の増加に結びつきますが、現在のような信用取引や発生主義会計のもとでは、たとえ利益が出ていても、それがすぐ現金の増加になるのではなく、受取手形や売掛金になっていたり、商品や製品といった在庫に姿を変えたりして、そのため現金が足らなくなってしまう訳です。従って、現金をたくさん持ちたいとするならば、受取手形や売掛金といった売上債権は極力少なくし、商品や製品といった在庫を持たないようにすること、更に非現実的ではありますが、仕入代金や費用の支払いをしないということができれば、現金はいつも潤沢になって、「勘定合って銭余り」の状態となります。

・現金主義会計

$$\begin{array}{l} \text{(現金売上－現金仕入＝利益)} = \text{(現金収入－現金支出＝現金増加)} \\ 50,000\text{円} - 30,000\text{円} = 20,000\text{円} \quad 50,000\text{円} - 30,000\text{円} = 20,000\text{円} \end{array}$$

・発生主義会計

$$\begin{array}{l} \text{(掛け売上－現金仕入＝利益)} \neq \text{(現金収入－現金支出＝現金増加)} \\ 50,000\text{円} - 30,000\text{円} = 20,000\text{円} \quad 0\text{円} - 30,000\text{円} = \blacktriangle 30,000\text{円} \end{array}$$

2. 支払資金はルールに従って動くし、資金のルールは誰にでもわかる

支払資金とは、現金をはじめすぐに支払が可能である当座預金や普通預金をいいます。極端な言い方をすれば、支払資金が潤沢な会社はどんなに不景気でも、どんなに赤字であっても倒産しません。会社（身体）に資金（血液）が円滑に流れている間は倒産（死亡）しないのです。

その資金というのは非常にわかりやすいものです。それはルールに従って動いているからです。私たちは貸借対照表をよく見ますが、貸借対照表を見るということは、実は会社の資金状態を丸裸にして見ていると同じことなのです。

なぜなら、貸借対照表を資金のルールに当てはめてみると、資金はルール通り馬鹿正直に動くので、見る人が見ればその会社の資金繰りの状態が手に取るようにわかるのです。そして、それは誰にでも簡単にわかることなのです。

3. 支払資金8つのルール

①【支払資金のルールその1：売上債権の原則】

- ・受取手形、売掛金といった売上債権の増加は、支払資金を減らし、その金額は売上債権の増加額と同じである。
- ・受取手形、売掛金といった売上債権の減少は、支払資金を増やし、その金額は売上債権の減少額と同じである。

②【支払資金のルールその２：在庫の原則】

・商品、製品、原材料といった在庫の増加は、支払資金を減らし、その金額は在庫の増加額と同じである。

・商品、製品、原材料といった在庫の減少は、支払資金を増やし、その金額は在庫の減少額と同じである。

③【支払資金のルールその３：資産の原則】

・貸付金、建物、機械装置といった資産の増加は、支払資金を減らし、その金額は資産の増加額と同じである。

・貸付金、建物、機械装置といった資産の減少は、支払資金を増やし、その金額は資産の減少額と同じである。

④【支払資金のルールその４：仕入債務の原則】

・支払手形、買掛金といった仕入債務の増加は、支払資金を増やし、その金額は仕入債務の増加額と同じである。

・支払手形、買掛金といった仕入債務の減少は、支払資金を減らし、その金額は仕入債務の減少額と同じである。

⑤【支払資金のルールその５：負債の原則】

・預り金、借入金といった負債の増加は、支払資金を増やし、その金額は負債の増加額と同じである。

・預り金、借入金といった負債の減少は、支払資金を減らし、その金額は負債の減少額と同じである。

⑥【支払資金のルールその６：資本の原則】

・資本金、法定準備金、剰余金といった資本の増加は、支払資金を増やし、その金額は資本の増加額と同じである。

・資本金、法定準備金、剰余金といった資本の減少は、支払資金を減らし、その金額は資本の減少額と同じである。

⑦【支払資金のルールその七：利益の原則】

・利益の増加は、支払資金を増やし、その金額は利益の増加額と同じである。

・利益の減少は、支払資金を減らし、その金額は利益の減少額と同じである。

⑧【支払資金のルールその八：非資金費用の原則】

・減価償却費、貸倒引当金といった非資金費用の増加は、支払資金を増やし、その金額は非資金費用の増加額と同じである。

・減価償却費、貸倒引当金といった非資金費用の減少は、支払資金を減らし、その金額は非資金費用の減少額と同じである。

①のルールにより、売上債権の滞留や不良債権化は支払資金を圧迫減少させますし、反対に売上債権の回収促進は支払資金を潤沢にすることがわかります。

②のルールにより、過剰在庫、滞留在庫、不良在庫の発生は支払資金を減少させることがわかります。

③のルールから遊休資産の所持は支払資金を眠らせることを意味しますし、反対に遊休資産の売却は支払資金を増加させます。

④のルールにより、支払手形や買掛金のサイトの延期は支払資金を増加させ、資金繰りが

楽になることが理解できます。

⑤による借入金とか預り金といった第三者からの資金の注入は、支払資金を増やしますが、反対に返済や返却は減少させることになります。

⑥のルールにより、資本金を増やす増資や内部留保である剰余金を増やすことは、返済する必要のない資金の源泉を増やすことになるので、支払資金が増加することがわかります。

⑦利益増加の要因である売上高などの収益を増やし経費を節減すれば、利益は増加して支払資金は豊かになりますが、売上の減少や経費の増加は利益の減少につながり支払資金を減少させます。

⑧資金支出の伴わない減価償却費や貸倒引当金の繰入といった非資金費用をたくさん計上することは、費用であっても資金の流失がないことから、その分支払資金が増加したことになります。

非資金費用は、利益のように積極的に資金を増やすものではありませんが、短期的に見れば、当面あるべき現金支出がないので、手元の資金は利益分以外に非資金費用の分だけ流失せずに残ることになります。

B/S

【資 産】	【負 債】
①売上債権の原則	④仕入債務の原則
②在庫の原則	⑤負債の原則
③資産の原則 (⑧非資金費用の原則)	【資 本】
	⑥資本の原則
	⑦利益の原則

4. まとめ

資金繰りは、上記の「支払資金8つのルール」に支配されますので、この「支払資金8つのルール」を理解すれば資金繰りは誰にでもできることになります。

まとめますと、上記B/Sの【資 産】にある①②③の原則については、「資産は資金の運用状態を表しますから資産が増えると資金が眠ることになります」ので資産の増加は支払資金が減少することを意味します。反対に資産が減ると支払資金は増えます。

【負 債】と【資 本】にある④⑤⑥の原則については、「負債と資本は資金の調達状態を示しますから負債・資本の増加は資金を増やすことになります」ので負債・資本の増加は支払資金の増加を意味します。反対に負債・資本が減りますと支払資金は減少します。⑦⑧の原則については、「利益」「非資金費用」が増えれば支払資金が増えることになります。反対に「利益」「非資金費用」減少は支払資金を減らします。